

英国における留学生のメンタルヘルス
—大学の支援体制に着目して—

ロンドン研究連絡センター

迎町 彩織

1. はじめに

本稿は、英国¹大学に在籍する外国人留学生（以下「留学生」）を対象としたメンタルヘルス支援体制に関する調査報告である。

世界保健機関によると、メンタルヘルスとは、自分自身の精神状態を把握して日常のストレスに対処でき、社会に何らかの貢献ができるような良い状態（ウェルビーイング）を指し、メンタルヘルスが損なわれた状態は健康であるとは言えない。個人のメンタルヘルスは社会的、心理的、生物学的な諸要因の影響を常時受ける²ことから、メンタルヘルスを維持・向上させるための行動や環境作りが欠かせない。

ところが、新型コロナウイルス感染症（以下「COVID-19」）の感染拡大は社会のあり方を一変させ、現在に至るまで私たちのメンタルヘル스에著しい影響を及ぼし続けている。日本全国の大学の8割が「学生のメンタルケア」を、6割が「学生の孤立化」を課題と考えているという朝日新聞と河合塾の共同調査の結果³や、COVID-19のパンデミックの中で世界各地の若者の5人に1人が抑うつや無気力の状態にあるとの国際連合児童基金（ユニセフ）の調査結果⁴が報告されており、日本のみならず世界全体で若者のメンタルヘルスをとり巻く環境はかつてない程に厳しい。

英国も例外でなく、学生のメンタルヘルスは危機的状況にある。イングランドの大学を対象に調査した Hubble & Bolton (2020) によると、メンタルヘルスの悪化を申告する学生の数はパンデミック以前から増加傾向にあり、2018/19年には82,000人の学生（全学生の4.3%）がメンタルヘルスの問題を申告しているが、これは2014/15年の申告数の2.5倍にあたる。メンタルヘルス悪化の要因として、学業のプレッシャーや親元を離れること、経済的不安などがあることが挙げられる。2020年初頭にCOVID-19の感染が急拡大したことにより友人や家族との交流が制限され、学生は孤立感にさいなまれるようになった。精神的不調により、成績低下、将来に対する悲観、中途退学、最悪の場合自殺に至るケースがある。

続く第2章で英国における学生のメンタルヘルス支援の動向と留学生のメンタルヘルスをとり巻く状況を概観する。第3章では英国大学関係者を対象に実施したインタビューを通して、各大学の支援体制を報告し、第4章でインタビュー調査により得られた情報を基に考察を試みる。

¹ 英国（グレートブリテン及び北アイルランド連合王国）はイングランド、ウェールズ、スコットランド、北アイルランドの4国から構成される連合国である。本稿において、4国のうち特定の国を指す場合は「イングランド」などと国名を本文または脚注に明記する。

² <https://www.who.int/news-room/fact-sheets/detail/mental-health-strengthening-our-response>（2022年1月3日アクセス）

³ 大学の8割「学生のメンタルケアが課題」 とくに心配なのは2年生。朝日新聞。2021年9月19日、<https://www.asahi.com/articles/ASP9K6R9XP80USPT00B.html>（2021年12月5日アクセス）

⁴ 本調査は21国において15歳から24歳の若者を対象にユニセフが実施した調査である。<https://www.unicef.org/press-releases/impact-covid-19-poor-mental-health-children-and-young-people-tip-iceberg>（2022年1月20日アクセス）

2. 調査背景

2.1. 英国の高等教育におけるメンタルヘルス支援の概況

障害や人種など、個人のあらゆる特性を理由とする差別を禁止するのが「2010年平等法 (Equality Act 2010)⁵」である。同法では、日常生活に相当かつ長期的に悪影響を及ぼす身体的または精神的な障害を持つ者を不当に扱うことや、差別につながる規定・慣行を適用することを禁止している。また、障害者が教育を受ける際の障壁をなくし平等を促進するため、障害者に対して合理的な調整を行う義務を教育機関に課している。英国各大学は同法に依拠した基本方針を独自に策定している。例えば、ウォーリック大学は「障害、メンタルヘルス及びインクルージョンの方針 (Disability, Mental Health and Inclusion Policy)⁶」により、大学の全構成員がより良いメンタルヘルスを維持できるよう、大学が果たすべき責任と障害を持つ学生や教職員が受けられる措置を規定している。他の多くの大学も Student Mental Health Policy や Disability Policy などと名称は大学により異なるものの、2010年平等法に基づく同様の方針を規定している。

メンタルヘルスの支援を推進するにあたり、英国大学協会 (Universities UK; UUK) は大学全体のアプローチ (whole university approach) の採用を全国の大学に呼びかけている。whole university approach とは、精神障害を持つ学生を個々にケアするという従前のアプローチに加え、大学のあらゆる活動 (教育、成績評価、研究、寮生活など) が学生のメンタルヘルスに影響を及ぼしうることに留意して予防ベースの対応を提案するものである。さらに、チャリティ団体の Student Minds は高等教育業界の包括的アプローチ (whole sector approach)、すなわち大学間の連携や国民健康保健サービス (National Health Service; NHS⁷) や大学が拠点を置く地域コミュニティとの協力により、高等教育全体で学生のメンタル支援に取り組むことを推奨し、各大学が取り組むべき指針やグッドプラクティスを集約した「大学メンタルヘルス憲章 (The University Mental Health Charter)⁸」を2019年に発表した。

whole university approach や whole sector approach によるメンタルヘルス支援に取り組めるよう、教育省 (Department for Education) 所管の学生局 (Office for Students) は2度の資金提供コンペティションを実施した。2018年に実施した Mental Health Challenge Competition では、プロジェクト募集に際して以下の優先選考基準が公表された。

- 入学前を含む、大学への移行期に焦点を当てた提案
- 学生や教職員にメンタルヘルスリテラシートレーニングを提供するなど、早期介入の提案
- 地域のプライマリ・ケアなどとの連携による、大学を超えたメンタルヘルス支援

⁵ グレートブリテン (イングランド、ウェールズ、スコットランド) において適用される法律で、年齢、障害、性適合、婚姻・市民パートナーシップ、人種、宗教・信条、性別、性的指向を理由とする差別を禁止している。
<https://www.legislation.gov.uk/ukpga/2010/15/contents> (2022年1月20日アクセス)

⁶ https://warwick.ac.uk/services/equalops/findsupport/policies/disability_mental_health_and_inclusion_policy_february_2020_v2.pdf (2022年1月20日アクセス)

⁷ JSPS London Newsletter No.64 JSPS London Cross Talk 第1回「英国における医療事情」参照。

https://www.jsps.org/newsletter/JSPSNL_64.pdf#page=15 (2022年1月6日アクセス)

⁸ https://www.studentminds.org.uk/uploads/3/7/8/4/3784584/191208_umhc_artwork.pdf (2022年1月20日アクセス)

審査の結果、2019年6月に学生のメンタルヘルス支援に新たなアプローチを生み出しうる10のプロジェクト（表1参照）に合計14.5百万ポンドを出資した⁹。

表1 Mental Health Challenge Competition 採択プロジェクト¹⁰

代表機関	プロジェクトの概略
バーミンガム大学	資格・経験を有するセラピストやボランティアに予約なしで相談できる「ハブ」の形成。
ダービー大学	教育成果を向上させながら学生のメンタルヘルスを改善するカリキュラム、教育法、評価の作成と提供。
キール大学	地域連携によりコミュニティ全体で学生のメンタルヘルスを支援する手法の開発・推進。
リンカーン大学	学校から大学への移行期における学生のメンタルヘルスを支援するデジタルツールとプラットフォームの開発。
リバプール大学	持続可能な臨床的介入を開発し、明確な紹介経路と介入を通じて他機関との連携を強化。
ニューカッスルアポン タイン大学	エビデンスに基づく心理療法を学内で提供すること、及び「マインドマネジメント」スキルのトレーニング。
ノーザンブリア大学	適切なメンタルヘルス支援を必要とする学生のマッチング。
ノッティンガム大学	留学生のメンタルヘルス支援のためのグッドプラクティスやケーススタディに基づくツールキットの開発。
サセックス大学	予防と早期介入に焦点を当てたメンタルヘルス教育トレーニングプログラムの開発。
西イングランド大学 ブリストル	NHS や学生自治会と大学の協力体制の強化による学生のメンタルヘルス支援。

このMental Health Challenge Competitionが学生全般のメンタルヘルス支援を対象とした事業であるのに対し、2020年に募集を開始したMental Health Funding Competitionでは、メンタルヘルス低下のリスクが特に高い属性の学生に焦点を当てた以下の優先選考基準が設けられた。

- メンタルヘルス低下のリスクを高めるとされる特徴を持つ学生に対する支援
例：少数派の民族¹¹の学生、経済的に恵まれない学生
- メンタルヘルス支援を利用する際の障壁を経験する可能性のある学生に対する支援
例：留学生、大学院学生、第一世代の学生（親族の中で初めて大学進学した学生）、社会的養護を経験した学生、LGBT+
- デジタルソリューションに焦点を当てた提案

2021年、18のプロジェクトの採択（表2参照）に合計6百万ポンドを出資することが発表された。なお、資金提供は2023年まで続く¹²。

⁹ 14.5百万ポンドのうち6百万ポンドを学生局が出資した。 <https://www.officeforstudents.org.uk/news-blog-and-events/press-and-media/innovation-partnership-and-data-can-help-improve-student-mental-health-in-new-14m-drive/> (2022年1月8日アクセス)

¹⁰ <https://www.officeforstudents.org.uk/advice-and-guidance/student-wellbeing-and-protection/student-mental-health/improving-mental-health-outcomes/>を基に筆者訳。(2022年1月8日アクセス)

¹¹ 2021年3月に人種・民族格差委員会は政府に対し、英国における少数民族の人々をBAME (Black, Asian and Minority Ethnic) と総称することを止めるよう勧告したが、本稿では便宜上BAMEという表記を併用する。

¹² <https://www.officeforstudents.org.uk/news-blog-and-events/press-and-media/funding-boost-to-support-student-mental-health/> (2022年1月8日アクセス)

表 2 Mental Health Funding Competition 採択プロジェクト¹³

代表機関	プロジェクト概要
ギルフォード現代音楽アカデミー	小規模な高等教育機関に在籍する学生のメンタルヘルス支援においてピアサポートを促進するデジタルハブの開発。
シティオブリバプールカレッジ	学生のメンタルヘルスを改善するための革新的な社会処方アプローチの開発及び実装。
デモントフォート大学	経済的に恵まれない、あるいは BAME の学生を対象とした、メンタルヘルスサービスへのアクセスの支援。
コベントリー大学	留学生や経済的に恵まれない学生を含む BAME 学部生のメンタルヘルス支援のためのリソース開発。
ロンドンサウスバンク大学	黒人学生を対象としたメンタルヘルス支援のためのプログラム開発・実装。
ニューキャッスルカレッジ大学センター	経済的に恵まれない学生のメンタルヘルスを支援するためのリソース開発、メンタルヘルスサービスのデジタル化。
セントメアリーズ大学 トウィッケナム	親族の中で初めて大学進学した学生を対象とした、大学への移行期のメンタルヘルス支援。
オープン大学	遠隔教育の学生を対象とした、ウェルビーイングや帰属意識の包括的支援。
ユニバーシティカレッジ ロンドン	学生のピアサポートを活発化させるためのトレーニングプログラムの確立。
ブラッドフォード大学	南アジアの学生がメンタルヘルスサービスを利用するのを妨げる文化的障壁に対するデジタルソリューションの開発。
ブリストル大学	自閉症の学生のメンタルヘルスをサポートするための教職員向けトレーニングプログラムの設計・開発。
セントラルランカシャー 大学	LGBT+やメンタルヘルスに対する障壁や偏見を低減するための情報コンテンツの制作。
チェスター大学	自閉症の学生やその関係者を対象とした、メンタルヘルスサポートプログラムの開発。
リバプール大学	精神的不調を抱える学生の支援を容易にするための VR 環境によるオンラインプラットフォーム構築。
ローハンプトン大学	社会的養護を経験した学生を支援するプログラムの提供。
ウエストロンドン大学	BAME の学生が精神疾患を発症するリスクを低減するための支援プログラムの構築。
ウエストミンスター大学	第一世代の学生（親族の中で初めて大学進学した学生）のメンタルヘルス支援のための VR 技術の開発・実装。
ウルバーハンプトン大学	Placement（職業体験）を行う学生が自身のメンタルヘルスを管理するのを支援するオンラインツールの開発・提供。

2.2. 英国における留学生とメンタルヘルス

図 1 は、高等教育統計局（Higher Education Statistics Agency; HESA）の統計に基づき、英国における留学生数及び全学生数に占める留学生比率を示したグラフである。2015/16 年に入学した留学生数は 443,320 人（全学生数に占める比率 19.0%）であったのが、2019/20 年には 556,625 人（同 22.0%）と堅調に増加していることがわかる。中国出身の留学生が最も多く（141,870 人

¹³ <https://www.officeforstudents.org.uk/advice-and-guidance/funding-for-providers/mental-health-funding-competition-using-innovation-and-intersectional-approaches/>を基に筆者訳。（2022 年 1 月 8 日アクセス）

14、全留学生数に占める比率 25.5%)、インド (55,465 人¹⁵、同 10.0%)、アメリカ合衆国 (20,730 人¹⁶、同 3.7%) が続く。

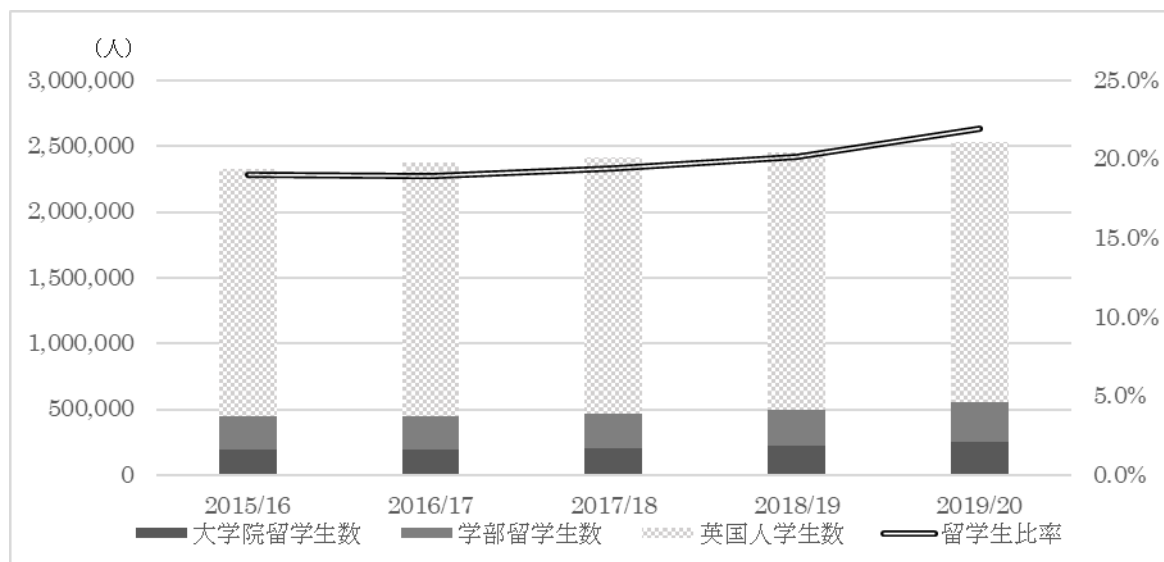


図1 英国における留学生数及び全学生数に留学生が占める比率

出典：HE student enrolments by domicile¹⁷ (HESA, 2021) を基に筆者作成。

英国のEU離脱(BREXIT)に伴うEU出身者の授業料の引き上げやCOVID-19の感染拡大による渡航制限、他国との留学生獲得競争の激化¹⁸など、EU出身学生を中心に英国離れ¹⁹が懸念される中、英国政府は2030年までに留学生数を年間60万人に増やすという数値目標を盛り込んだ国際教育戦略²⁰を発表した。この目標実現のため、国際貿易省(Department for International Trade)とBritish Councilが共同出資するStudy UKキャンペーンにより、アジアやアフリカなどの潜在的な留学生市場の開拓に乗り出している。併せて、IT機器の購入やメンタルヘルスの支援など、在学中の支援体制の強化も主要戦略の1つとなっている。

留学生は言語の壁や自国の高等教育制度との違い、ホームシック、異文化適応過程のストレス、帰属意識の欠如、差別といったメンタルヘルスに影響を及ぼしうる困難に直面し、特に孤独や自尊心の低下を引き起こすという(Mori, 2000; Taylor & Ali, 2017; Penn Jones et al., 2019)。COVID-19の状況下において、母国に一時帰国した留学生にとっては大学からの孤立が、母国に戻れず英国に留まっている学生にとっては母国の家族や友人からの孤立が起こりうるが、こうした現状を踏まえ、留学生がどこからでもアクセスしやすい形で情報やアドバイスを提供すること

¹⁴ 2019/20年の人数。 <https://www.hesa.ac.uk/data-and-analysis/students/table-11> (2022年1月4日アクセス)

¹⁵ 前掲注14

¹⁶ 前掲注14

¹⁷ <https://www.hesa.ac.uk/data-and-analysis/sb258/figure-9> (2022年1月4日アクセス)

¹⁸ 留学生受入数において、英国はこれまでアメリカに次ぐ2位であったが、最新の調査ではオーストラリアが英国を僅かに上回り、英国は3位となった。 <https://doi.org/10.1787/b35a14e5-en> (2022年1月6日アクセス)

¹⁹ [FT]英国留学の人気に陰り EUからの出願が大幅減。日本経済新聞。2021年9月13日、日本経済新聞電子版、 <https://www.nikkei.com/article/DGXZQOCB130BC0T10C21A9000000/?unlock=1> (2022年1月6日アクセス)

²⁰ Department for Education & Department for International Trade. International Education Strategy: 2021 update: Supporting recovery, driving growth. <https://www.gov.uk/government/publications/international-education-strategy-2021-update/international-education-strategy-2021-update-supporting-recovery-driving-growth> (2022年1月6日アクセス)

が重要だと学生局は強調している²¹。

さらに、留学先の大学でどのようなメンタルヘルスサービスが提供されているかを知らなかったり、メンタルヘルスに対する偏見からサービスの利用を躊躇したりする留学生がいることが確認されており、メンタルヘルスに対する偏見はアジア系の留学生を中心に見られる。中国出身の学生の中には文化的な背景が原因でカウンセリングを有効活用できず、メンタルヘルス支援を早期に打ち切る傾向があることが先行研究で指摘されている (Mori, 2000; Furnham & Chan, 2004; Liu, 2009)。

3. 事例調査

3.1. インタビュー概要

英国大学におけるメンタルヘルス支援の現状や留学生のメンタルヘルス支援のための取り組み、大学または個々の大学職員が果たすべき役割などについて、学生のメンタルヘルス支援に従事する大学教職員から聞き取ることを目的にインタビュー調査を行った。学生のメンタルヘルス支援を比較的活発に進めている機関に対しインタビューすることが適切と考え、学生局のコンペティション（第2章参照）にて助成を受けた大学や、イギリスの高等教育専門誌 **Times Higher Education** が公表する **Impact Rankings 2021: good health and well-being**²² 上位の大学など約40大学を選定し、各大学にインタビューを依頼した²³。応諾した6大学の関係者（以下「協力者」）に対し、表3の通り2021年11月から2022年1月の間にインタビューを実施した。

表3 協力者の所属大学²⁴及びインタビュー実施方法

所属大学	インタビュー実施日	実施方法	実施時間
(1) ダービー大学	2021年11月12日	ZOOM	60分
(2) リバプール大学	2021年11月23日	ZOOM	60分
(3) リーズ大学	2021年12月2日	ZOOM	30分
(4) ロンドン大学東洋アフリカ研究学院	2021年12月15日 ²⁵	質問票	
(5) ユニバーシティカレッジロンドン	2022年1月10日	ZOOM	45分
(6) ウェストロンドン大学	2022年1月11日	ZOOM	60分

²¹ <https://www.officeforstudents.org.uk/publications/coronavirus-briefing-note-supporting-international-students/#support> (2022年1月24日アクセス)

²² <https://www.timeshighereducation.com/rankings/impact/2021/good-health-and-well-being#/page/0/length/25/locations/GBR/sort%20by/rank/sort%20order/asc/cols/undefined> (2022年2月3日アクセス)

²³ 各大学のウェブサイト上で公表されているメンタルヘルス支援部署の連絡先に直接依頼した他、大学関係者を通じてインタビューを依頼した。

²⁴ 匿名を希望する協力者がいるため、本項においては所属大学のみを記載した。

²⁵ 協力者からの回答日。

3.2. 各大学の概要

(1) ダービー大学

イングランド中部ダービーにある大学。1851年に設立された教員養成機関が起源で、1992年に現在のダービー大学となった。英国における教育成果の評価の枠組みである **The Teaching Excellence and Student Outcomes Framework (TEF)** ²⁶で金賞を受賞するなど、教育レベルの高さに定評がある。20年前よりオンライン課程にも注力しており、100以上のコースがオンラインで提供されている。2019/20年入学者 19,685人のうち留学生は 1,950人（留学生比率：9.9%）²⁷。

(2) リバプール大学

イングランド北西部リバプールにある大学。1881年にユニバーシティカレッジリバプールとして設立され、1903年にリバプール大学となった。英国の名門 24 大学から構成されるラッセルグループ加盟大学であり、ノーベル賞受賞者 9 人を輩出するなど研究力の高さが国際的に注目されている。2019/20年入学者 29,600人のうち留学生は 9,165人（留学生比率：31.0%）²⁸。

(3) リーズ大学

イングランド北部リーズにある大規模大学。1874年にヨークシャー科学大学として設立、その後大学再編を経て 1904年にリーズ大学となった。リバプール大学同様ラッセルグループ加盟大学であり、TEF では金賞を受賞するなど、同大学の研究・教育レベルは高く評価されている。2019/20年入学者 36,330人のうち留学生は 10,760人（留学生比率：29.6%）²⁹。

(4) ロンドン大学東洋アフリカ研究学院

ロンドン中心部にある同大学は 1916年に設立された。アフリカやアジア、中近東地域の研究に特化したユニークな大学であり、これらの地域に関連する 130万冊以上の蔵書がある図書館は国際的に重要な学術図書館の 1つに位置付けられている。2019/20年入学者 5,795人のうち留学生は 2,455人（留学生比率：42.4%）³⁰。

(5) ユニバーシティカレッジロンドン

ロンドン中心部にある大規模大学。1826年設立。1878年にイングランドの大学で初めて女性の入学を認めた。ラッセルグループ加盟大学で、29人のノーベル賞受賞者をこれまでに輩出している。研究レベルの高さは国際的に認知されており、THE World University Rankings（2022年

²⁶ <https://www.officeforstudents.org.uk/advice-and-guidance/teaching/tef-outcomes/#/tefoutcomes/>（2022年2月3日アクセス）

²⁷ 2019/20年の入学者数。フルタイムだけでなく、パートタイムの学生も含まれる。<https://www.hesa.ac.uk/data-and-analysis/students/whos-in-he>（2022年2月3日アクセス）

²⁸ 前掲注 27

²⁹ 前掲注 27

³⁰ 前掲注 27

18位³¹⁾やQS World University Rankings (2022年8位³²⁾では毎年上位にランクインしている。2019/20年入学者41,095人のうち留学生は20,170人(留学生比率:49.1%)³³⁾。

(6) ウェストロンドン大学

ロンドン西部にある大学。1860年設立。その後大学再編や幾度かの名称変更を経て、2011年にテムズバレー大学からウェストロンドン大学という名称になった。TEFで銀賞を受賞しており、奨学金の支給やキャリアサポートといった在学中の細やかな支援が特長で、学生の満足度は高い。2019/20年入学者11,985人のうち留学生は2,710人(留学生比率:22.6%)³⁴⁾。

3.3. 協力者の回答

(1) ダービー大学

大学メンタルヘルス憲章(第2章参照)のパイロット大学となったのがダービー大学である。Student Wellbeing Centre³⁵⁾が留学生か英国人学生かを問わず、身体的または精神的にサポートが必要な学生の支援を行っている。希望する学生に対してカウンセリングを実施し、オンライン学部には在籍する学生に対してもSkypeを使ってカウンセリングセッションを提供している。Student Wellbeing Centreのウェブサイトには、メンタルヘルス向上のための生活上のアドバイスや、Student MindsやNHSのメンタルヘルス関連のウェブページへのリンクがある。キングズカレッジロンドン及びStudent Mindsとの共同プロジェクト「The Wellbeing Thesis³⁶⁾」を実施し、大学院博士課程の学生を対象としたメンタルヘルス支援のための情報を発信している。同大学においてヘルスケアや心理学は人気の高い領域であり、メンタルヘルスに対する学生の関心も高い。自身が心の傷を負っていることが心理学を学ぶきっかけとなっている学生もおり、在学中に精神的不調が発生する可能性が高く、それ故にメンタルヘルスサービスの利用率も高い。

大学の国際化やマイノリティに対する学内の意識が他大学に比べ高くないことが、留学生のメンタルヘルスを支援する上での障壁と言える。人種による偏見をなくすため、学生の提出物の氏名を伏せるなどの配慮を行っている。留学生のメンタルヘルス支援を推進するにあたり、学生のバックグラウンドやメンタルヘルスの状態を確認することが重要である。「留学生」や「BAME学生」、「非英国人」などと一括りにすると、個々の学生のメンタルヘルスの問題を見落とし、適切な支援ができない可能性がある。

(2) リバプール大学

Wellbeing Advice and GuidanceはWellbeing team、Counselling team、Mental health advisory teamの3チームから構成される。Wellbeing teamはリバプール大学におけるメンタル

³¹⁾ [https://www.timeshighereducation.com/world-university-rankings/2022/world-ranking#/page/0/length/25/sort by/rank/sort_order/asc/cols/stats](https://www.timeshighereducation.com/world-university-rankings/2022/world-ranking#/page/0/length/25/sort%20by/rank/sort_order/asc/cols/stats) (2022年2月3日アクセス)

³²⁾ <https://www.topuniversities.com/university-rankings/world-university-rankings/2022> (2022年2月3日アクセス)

³³⁾ 前掲注27

³⁴⁾ 前掲注27

³⁵⁾ <https://www.derby.ac.uk/study/student-support/health-and-wellbeing/> (2022年1月5日アクセス)

³⁶⁾ <https://thewellbeingthesis.org.uk/> (2022年1月5日アクセス)

ヘルス支援の入口かつ中枢であり、学生はメンタルヘルスの状態の程度に関わらず同チームにま
ず相談することになっている。学生がより良い状態で学業や課外活動に取り組めるよう支援して
いる。学生からの相談内容や症状の程度に応じて、Wellbeing team は他 2 チームにトリアージす
る。メンタルヘルスの状態が軽度ではないと判断された学生は Counselling team が提供するカ
ウンセリングセラピーを受ける。心療内科にかかっている学生や著しい精神的不調状態と判断さ
れた学生に対しては、Mental health advisory team に在籍する、専門的な訓練を受けたアドバイ
ザーが学外の専門機関と連携・協力しながら、当該学生を支援する。他 2 チームはロックダウン
中に完全オンラインで、現在はハイブリッド（対面又はオンラインを学生が選択可能）での支援
を行っているが、Mental health advisory team はかねてより対面での支援を基本とする。英国人
学生か留学生かを問わず、全ての学生が無料でサービスにアクセスできる体制を整えている。

COVID-19 が学生のメンタルヘルスに与えた影響は大きい。オンライン授業に移行し、移動時
間などがなくなって自由な時間が増えたことを楽しんでいる学生がいる一方、孤立や不安を感じ
る学生や大学生活に対するモチベーションを失った学生が多い。特に留学生の場合、母国に帰る
のが難しい、家族に会えない、キャンパスで授業や課外活動に参加できないことへの失望感があ
る。

留学生のメンタルヘルスを支援するために注力しているのは、学内でどのようなメンタルヘル
スサービスを利用できるのかに関する情報の発信である。入学直後、特に最初の 1 週間は孤独や
文化の違いに戸惑い、メンタルヘルスに影響を及ぼすことがあるため、学生寮や大教室で宣伝活
動を行っている。特に入学直後は 1 回説明しただけでは学生はすぐに忘れてしまうため、同じ内
容を繰り返し説明している。また、入学前の情報発信も同様に重要である。本来利用できるはず
のサービスの存在を知らなかったり、利用できると思っていたサービスが大学では提供されてい
なかったりといったミスマッチを防ぐためにも、できれば留学生が出願する段階で、どのような
メンタルヘルスサービスが利用できるのかをウェブサイトなどで知らせると良い。

留学生のメンタルヘルス支援を推進する上で課題を挙げるとすれば、留学生か英国人学生かを
問わず学生はカウンセリングを受けたがらないので、学生にメンタルヘルスサービスの利用を促
すことが難しい。自傷や薬物の過剰摂取で緊急搬送され、病院から大学に連絡が来て初めて学生
のメンタルヘルスの状態を把握することがある。このような事態を防ぐには、前述のメンタルヘル
スサービスの認知度を高めるための情報発信、そしてメンタルヘルスサービスの利用に抵抗感
がなくなるようなオープンな環境作りを心掛けている。

前述の Wellbeing Advice and Guidance 内 3 チームは常に連携しながら学生のメンタルヘルス
支援に取り組んでいる。また、メンタルヘルスを損なう原因が経済的事情か学業に関わることか、
在留資格に関する悩みかなどに応じて、学務や奨学、留学生支援部署、さらには学生自治会に協
力を要請する。学内連携に比べ大学間連携は難しい。University Mental Health Advisers
Network³⁷や National Association of Disability Practitioners³⁸という英国内のネットワークが
あり、年次会合や情報交換の機会があるが、COVID-19 の影響で以前ほど積極的に活動に参加で
きていない。

³⁷ <https://www.umhan.com/> (2022 年 1 月 18 日アクセス)

³⁸ <https://nadp-uk.org/> (2022 年 1 月 18 日アクセス)

全ての教職員がメンタルヘルスに関して最低限理解することが重要である。もちろん全員が専門的知識を持つ必要はない。大学生活のあらゆる側面が学生のメンタルヘルスに影響を及ぼしうるし、メンタルヘルス関連でない部署の職員が学生のメンタルヘルスの問題に気付くきっかけとなる可能性がある。メンタルヘルスに関連する部署の存在や連絡先を把握しておくことと、学生が気兼ねなく率直に相談できる雰囲気作りが重要。学生からメンタルヘルスの話をされることを避けたがる職員もいるが、その職員がメンタルヘルスの専門家でないことは学生もわかっているので、学生の話に耳を傾けるだけで良い。然るべき部署や学外の機関に教職員が自信を持って案内すれば、学生も安心する。

(3) リーズ大学

Student Counselling and Wellbeing は Wellbeing team、Counselling team、Mental health advisory team の 3 チーム編成で、英国人か留学生か、学部生か大学院生かといった区別をせずに全ての学生がメンタルヘルスサービスにアクセスできる体制となっている。Wellbeing team は症状の比較的軽い学生を対象にしている。落ち込みや不安、パニック症状が見られる学生にセラピーを実施し、学生が精神的不調に自ら対処できるよう、生活習慣などのアドバイスをする。留学生に関して、大学に適応しようとする過程でホームシックや精神的苦痛などの一般的にみられる反応も同チームがサポートする。Counselling team は主に中程度の症状の学生に対し、5 回前後のカウンセリングセッションを提供する。Mental health advisory team は医療機関で深刻なメンタルヘルスの状態にあると診断された学生を対象に、学外の医療機関や専門家と連携して学生一人ひとりを支援する。この他、ウェビナー（毎週）、マインドフルネスのワークショップ（隔週）などを開催している。学内の留学生オフィスが毎週グローバルカフェを開催し、新規の留学生が互いに交流できる機会を提供している。また、バディー制度³⁹があり留学生が早期に大学に適応できるよう支援している。

COVID-19 の感染拡大やロックダウンがもたらした悪影響は誰もが認識しているところである。摂食障害やこれまで報告されていないような症状も報告されるようになった。社会的孤立によるストレスは留学生の間で顕著。入国制限や、中国人留学生に対するヘイトなども報告されている。

学生を支援するために、学内のスポーツ部署と連携し、メンタルヘルスサービスを受けた者がジムを利用できるようにしている。学生自治会とも連携し、予約不要の面談を実施している。英国内の 140 大学が参加するネットワーク（University of Counselling Services）に参加し、メールリストを使った大学間の情報交換や年次会合を行っている。

職員により経験や知識は異なり、大学内の限られた人員やリソースを効率的に活用するために、個々の学生が具体的にどのような症状かに合わせ、サポート方法を変える。精神的苦痛は留学生共通の問題なので、大学入学期に重点的に支援を行うことがメンタルヘルスの悪化予防につながる。留学以前から精神障害の診療を受けている場合、英国に来る時に診断書を持ってきてもらって然るべき治療を継続で受けられるようサポートする。多くの留学生にとって英語は第二言語なので、必要に応じてカウンセリング時に通訳者を配置することも効果的と考える。また、メンタ

³⁹ リーズ大学内の学生同士（例えば 1 年生と 2 年生など）をマッチングし、ピアサポートを促進する取り組み。
https://students.leeds.ac.uk/info/10600/opportunities/1526/welcome_buddy_scheme（2022 年 2 月 7 日アクセス）

ルヘルスに対するアプローチや考え方は国や文化により異なることを理解しておくが良い。

(4) ロンドン大学東洋アフリカ研究学院

英国人学生と同じサービスを提供しているが、留学生や黒人学生向けのカウンセラーがいる。学生局が実施した **Mental Health Challenge Competition** の助成（第2章参照）を受け、ノッティンガム大学などと共同で「**International Student Mental Health Project**」を実施し、2021年12月に留学生のメンタルヘルスを支援するためのツールキットを公開した⁴⁰。

COVID-19は、現在メンタルヘルスサービスへの需要が高まっている要因の1つであり、メンタルヘルスサービス利用希望者が英国人学生か留学生かを問わず今後更に増えることが予想される。メンタルヘルスサービスを利用することに抵抗がある留学生がいることが問題だと考えるが、心理教育や学生への積極的な働きかけが重要であるので、学生向けのワークショップを実施している。

基本的に大学職員はサポートサービスの心臓部であるとともに、学生が最初にコンタクトすることから、親しみやすく友好的であり、学生の話に耳を傾ける必要がある。また、必要に応じて専門機関などに橋渡しをしなければならない。エスカレーションルートを認識し、職員の能力を最大限に発揮するために上長によってサポートされるべきである。

(5) ユニバーシティカレッジロンドン

Disability, Mental Health and Wellbeing team では、メンタルヘルスの悩みがある学生に対してアドバイス (**non-therapeutic advice**) を行う。当日予約または事前予約のいずれかによりアドバイザーの面談を受けることができ、通常はまず当日予約の面談を受け、2回目以降の面談を希望する場合やより複雑な問題を相談したい場合は、事前予約により1回あたり45分間の面談を受けることができるが、現在は事前予約面談の希望者が増えており、予約から面談までは2週間程度要する。COVID-19の感染対策のため、現在は主にオンライン面談を実施しているが、学生が希望する場合は対面に切り替えている。学生の精神状態やニーズに応じて対応方法を変更または調整しており、多くの場合初回の面談を1、2回経た後、**Counselling team** が提供するカウンセリング (**therapeutic support through counselling**) に橋渡しする。また、精神的不調があるというGP (かかりつけ医)⁴¹の診断書がある場合、**Extenuating Circumstances**⁴²に申請し、提出物の提出期限延長などの措置を1回限りで受けることができる。障害や長期的な精神的不調の状態にある学生との面談を通して、学生が何に困難を感じ、どのような支援を求めているかを把握し、**Summary of Reasonable Adjustments (SORA)**⁴³を作成する。学科により実際の対応は異なるが、学生はSORAに沿ってコースワークの期間延長や試験会場の変更などの合理的な調整措置を受けることが可能になる。

⁴⁰ <https://www.thegloballyminded.com/> (2022年1月5日アクセス)

⁴¹ 前掲注7

⁴² <https://www.ucl.ac.uk/academic-manual/chapters/chapter-4-assessment-framework-taught-programmes/6-extenuating-circumstances/extenuating> (2022年1月6日アクセス)

⁴³ <https://www.ucl.ac.uk/academic-manual/chapters/chapter-4-assessment-framework-taught-programmes/section-5-reasonable-adjustments> (2022年1月6日アクセス)

留学生に対しては、GP 登録するよう案内している。学業のプレッシャーなど、学生特有の不調をよく理解していることから、大学近辺の GP に登録することを推奨している。前述の **Extenuating Circumstances** に申請するには GP の診断書が必須であることから、入学後速やかに GP 登録を済ませるよう推奨している。また、**BAME** 学生が直面しうる組織的なバリア (**systematic barriers**) を認識し、軽減するよう努力しており、**BAME** 学生が差別を受けたことによる精神的不調などを話し合えるグループを作れないか検討しているところである。中東やカリブなど様々な地域出身のカウンセラーやアドバイザーが採用されており、**BAME** 学生のメンタルヘルス支援においては良い効果があると考えている。

COVID-19 の感染拡大以降は在宅の時間が長くなり、学生はロンドンでの暮らしを楽しめず、大学のダイバーシティな環境を体験できていない。学業面にも影響が表れており、他者に対する不寛容、人生に対する主体性の欠如も見られる。国の隔離規則が一貫していないこともメンタルヘルスに影響を及ぼしていると思われる。加えて、特にアジア系学生に対する差別が見られる。一時解雇や感染の恐怖など、長期間にわたる不安を抱えている。

前述の GP 登録推奨と **SORA** はグッドプラクティスだと言える。GP 登録により、**NHS** と大学の双方のサポートを学生は受けられる。また、学生は周囲の学生と自分を比較して落ち込むことがあるが、**Disability, Mental Health and Wellbeing team** のアドバイザーは学生が不安に陥った時取るべき行動をいくつか提案し、ゆくゆくは学生自らが考えて行動できるようにサポートしている。

他方、メンタルヘルス支援を進める上での困難は、メンタルヘルスに対する認識が学生により異なる点である。東アジア出身の学生は自身のメンタルヘルスの状態について相談をためらう傾向にあり、黒人学生もまたメンタルヘルスサービスの利用頻度が低い。両親のメンタルヘルスに対する考え方に影響を受けたり、学業を優先してメンタルヘルスは二の次になったりする学生もいる。画一的ではなく、個々の学生に合わせたメンタルヘルス支援を行う必要がある。

大学で組織的に学生のメンタルヘルス支援にあたるため、学務系部署と日頃から連携している。また、**student of concern form**⁴⁴により、ある学生が危機的状況にあることをその学生の周辺人物が通報できる仕組みがある。**NHS** が運営する **Camden & Islington Crisis Team** や大学近辺の GP など外部組織とも連携し、学生のメンタルヘルス支援体制を整えている。ユニバーシティカレッジロンドンの取り組みについて他大学から問合せを受けた際は、グッドプラクティスなどを共有しており、高等教育業界全体のメンタルヘルス支援体制の充実化を目指している。

メンタルヘルスの専門部署や医療機関の前に学生が初めにコンタクトを取るのは大学職員である。相談しやすい雰囲気作りに努めるのはもちろん、学生の状態は一人ひとり異なるため、固定観念にとらわれず学生に質問しながらその学生のメンタルヘルスの状態を把握することが重要。ユニバーシティカレッジロンドンでは、アンコンシャスバイアス (**unconscious bias**) やラベリングがメンタルヘルスにダメージを与えることを自覚し、適切なコミュニケーションが取れるようにスタッフトレーニングを実施している。

⁴⁴ <https://www.ucl.ac.uk/students/support-and-wellbeing/if-you-are-concerned-about-student> (2022年1月6日アクセス)

(6) ウェストロンドン大学

Wellbeing Team は留学生か英国人学生かを問わず在籍する全ての学生に対し、メンタルヘルスのアドバイスやカウンセリング、ワークショップなど多様なメンタルヘルスサービスを提供している。また、チャリティ団体の Rethink Mental Illness と連携して、メンタルヘルスの知識やアクティブリスニングスキルを学生 (UWL Student Wellbeing Champions⁴⁵) が習得する機会を提供している。メンタルヘルスや病気などの問題を抱える学生は英国政府が提供する補助金 (Disabled Students' Allowance⁴⁶) を申請することができ、当該学生の就学上の支援に使用可能である。申請資格のない学生に対しては、公平性の点から同等の支援を大学独自に用意している。

学生局が実施した Mental Health Funding Competition の助成 (第 2 章参照) を受け、UWL Student Union 及び West London NHS Trust と共同で「People Like Us⁴⁷」というプロジェクトを開始し、現在進行中である。メンタルヘルスの問題は誰しものが経験するが、国籍や人種、障害の有無、性的志向、宗教観などが理由でメンタルヘルスの問題を抱える可能性がある。現在、学生の 60%ほどが BAME の背景を持つが、BAME 学生は日常的に差別を経験し、それがメンタルヘルスに大きな影響を及ぼしている。更に、BAME と言うと 1 つのグループのように扱われがちだが、メンタルヘルスの状態やメンタルヘルスに対する考え方は皆同じではなく、学生の出身国や性別などによっても変わる。このように多様なバックグラウンドを持つ学生たちの事例に基づき、学生が抵抗感なくメンタルヘルスサービスを利用し、自身のメンタルヘルスを良い状態で維持できるよう、革新的な支援体制を構築することを目指している。学生のニーズに合った支援ツールを設計するため、プロジェクトには学生も参加している。このプロジェクトの肝となるのが、ピアサポートを可能にするオンラインコミュニティの形成である。学生は似たようなバックグラウンドや同じ経験をした人の話を聞きたいと思っており、学生同士の情報交換やお互いを助け合える場を提供している。

COVID-19 が学生のメンタルヘルスに及ぼした影響は甚大である。通学できないことから、大学の構成員であるという感覚の欠如や不安、抑うつが見られる。対面授業が再開しても授業に出るのが困難だと感じる学生もいる。ロックダウンを機に、メンタルヘルスサービスもオンラインで提供されるようになり、現在はハイブリッド (対面、オンライン両方)。対面ならではの良さがある一方、オンラインや電話でのカウンセリングは、学生が自身が落ち着ける場所から参加できるというメリットもある。2021 年にカウンセリングを受けた学生の数は前年比で 40%増加し、2022 年現在も増加傾向にある。この増加は学生がメンタルヘルスサービスを積極的に利用する状況になりつつあることの現れであり、メンタルヘルスの悪化予防や早期介入が可能になるので、非常に良い傾向だと評価している。

グッドプラクティスは 3 点挙げられる。1 点目は職員の多様化に努めていることである。前述の通り、学生は同じようなバックグラウンドや経験のある人からのサポートを望んでいる。Wellbeing Team では白人女性の職員が多かったが、近年は民族やその他の特性 (障害、性的志向など) が多様なアドバイザーやカウンセラーを採用している。2 点目はメンタルヘルス支援を受

⁴⁵ <https://www.uwl.ac.uk/current-students/student-news/students-champion-wellbeing-and-mental-health-support> (2022 年 1 月 6 日アクセス)

⁴⁶ <https://www.gov.uk/disabled-students-allowance-dsa> (2022 年 1 月 6 日アクセス)

⁴⁷ <https://www.uwl.ac.uk/current-students/support-current-students/people-us> (2022 年 1 月 6 日アクセス)

けるための登録プロセスを簡略化したことである。Student Hub という学生専用のウェブサイト
で予約できるようにした。3 点目は Togetherall⁴⁸と連携し、夜間や週末など大学が閉まっている
時間帯でも年中無休でオンラインサポートを受けられるようにしている。

他方、学生のメンタルヘルス支援の障壁となりうるのが、留学生や BAME 学生の中にはメンタルヘルスについて話すことをタブー視する風潮が見られることである。また、学業やアルバイト、家事、育児など日々やることが多く、メンタルヘルス支援を受けることの優先順位が下がりがちである。サービスの利用を学生に呼び掛けており、前述のメンタルヘルスサービス利用学生数の増加はその効果と言える。

大学内には様々なワーキンググループがあり、大学の諸問題解決のために話し合いの場が持たれ、日常的に複数部署と協力・連携している。学外との連携に関しては、London Higher Wellbeing Network⁴⁹や National Educational Network に参加し、他大学との連携や情報交換を行っている。People Like Us の共同実施機関である West London NHS Trust とはより強固な協力関係を築くことができしており、Wellbeing team の職員向けにトレーニングを実施するなどしている。イーリング区⁵⁰のワーキンググループにも参加し、学生のメンタルヘルス向上のために学生と地域のコミュニティサービスをつなぐ取り組み（Social Prescription）も行っている。

大学構成員全員が学生のメンタルヘルスに責任を負っている。学生に接する職員やアカデミックチューターは微笑みや日常的な会話といった何気ない行動が、学生が孤立しがちな現在の状況において学生にどれほど良い効果をもたらすか認識すべきだろう。そうは言っても、非専門家の職員ができることには限界がある。専門的支援をどこで受けられるかを把握し、学生に案内できるようにすべきである。Wellbeing Team にはメンタルヘルスアドバイザーやカウンセラーがいるが、学生の状態に応じて NHS や外部の専門機関に橋渡しするようにしている。アカデミックチューターを含む職員向けの啓発トレーニングも実施しており、いつどこで適切なメンタルヘルス支援を受けることができるかを職員が理解することを助けている。

※進行中のプロジェクト「People Like Us」に関する内容は、同プロジェクト参画機関であるウエストロンドン大学、UWL Student Union、West London NHS Trust の三者間で締結した連携協定に反しない範囲内でインタビューを実施し、本稿に掲載した。

4. 考察

本章では、インタビュー調査により得られた情報を整理し、日本における留学生のメンタルヘルス支援を一層推進するためにどのような示唆があるかという視点から考察する。

⁴⁸ <https://togetherall.com/en-gb/> (2022年1月6日アクセス)

⁴⁹ <https://www.londonhigher.ac.uk/> (2022年1月6日アクセス)

⁵⁰ ロンドン西部の行政区。ウエストロンドン大学のメインキャンパスはイーリング区にある。

4.1. 留学生のメンタルヘルス支援体制

インタビューを実施した6大学のうち3大学では学生のメンタルヘルスの状態に応じて担当チームが決まっており、学生が著しい精神的不調状態に陥っていると判断された場合は医療機関と連携するという支援体制を確立している。各大学において、カウンセリングや生活上のアドバイス、情報提供、ウェビナーなどを実施している。ただし、これらは留学生のみを対象としたものではなく、在籍する全ての学生が利用可能である。COVID-19が学生のメンタルヘルスに及ぼした影響は明らかで、とりわけ留学生は孤立や不安、抑うつ、モチベーションの喪失、帰属意識の欠如、入国制限によるストレス、人種差別などを経験し、メンタルヘルスサービスを利用する学生は留学生を含め増加傾向にあり、今後も増え続けるとみられる。しかし利用学生の増加は、早期介入や個々の学生に合わせた支援が可能になることから肯定的に捉えられている。一部の大学では、多様なバックグラウンドを持つカウンセラーやアドバイザーを採用したり、留学生や少数派の民族の学生のメンタルヘルスに焦点を当てたプロジェクトを進行したりしている。グッドプラクティスとして以下の点が挙げられた。

- メンタルヘルスサービスの広報活動
- 留学生同士の交流機会の提供（オンライン、対面）
- 留学生にとって有用なメンタルヘルス関連情報の発信
- 合理的な配慮（Extenuating Circumstances、SORA）
- GP登録の推奨
- カウンセリング予約プロセスの簡略化
- 外部機関提携による年中無休のサポート

また、リーズ大学の協力者より、留学生の言語能力に応じてカウンセリング時に通訳者を同席させることが効果的との回答があった。一方、課題として挙げられたのが、留学生がメンタルヘルス支援の利用を躊躇することである。メンタルヘルスサービスを利用することへの抵抗感やメンタルヘルスに対する認識の文化差、学業などが多忙であることが背景にあるとみられ、先行研究（Mori, 2000; Furnham & Chan, 2004; Liu, 2009）の指摘とも一致する。

例えば東京大学では、Programs in English at Komaba (PEAK) や Global Science Course (GSC) という英語で学位取得可能なプログラムが提供されており、在籍する全ての留学生が日本語に堪能とは限らないが、カウンセリングは原則日本語で行われる⁵¹。また、全留学生の65.9%にあたる3,045名が中国人留学生で、アジア出身の留学生が全留学生の90%近くを占めており⁵²、留学生の言語能力やメンタルヘルスに対する偏見がメンタルヘルスサービスの利用を妨げる可能性があることに注意を向ける必要である。加えて、COVID-19の収束が見通せず学内の諸活動が制限される状況において、いかに留学生の孤立を防ぎ、帰属意識を高めるかが課題となるだろう。メンタルヘルスサービス認知度向上のための広報活動やウェビナー・ウェブサイトによる情報発信、多言語対応が可能なカウンセラーの採用もしくは通訳者の派遣などを行い、留学生が気兼ねなく支援を受けられる体制を整備するとともに、留学生同士（あるいは留学生と教職員）の交流

⁵¹ https://www.u-tokyo.ac.jp/en/current-students/counseling_center.html（2022年1月26日アクセス）

⁵² 2021年11月1日時点の人数及び比率。 <https://www.u-tokyo.ac.jp/content/400177950.pdf>（2022年1月6日アクセス）

機会を設け、メンタルヘルスを互いに向上させることができるような環境作りが重要である。

4.2. 大学及び教職員に期待される役割

メンタルヘルス支援部署のみが対応するのではなく、大学全体、さらには高等教育業界や地域が一丸となって学生のメンタルヘルスに取り組む **whole university approach** や **whole sector approach** (第2章参照) を実現するため、各大学において学務や留学生オフィスなど関係部署と常時連携するとともに、NHS やチャリティ団体、地域のコミュニティとの連携、英国大学間のネットワークを活用した情報交換などを行っている。また、今回インタビューしたいずれの大学も学生局が助成したプロジェクト (第2章参照) に代表機関ないし協力機関として参画しており、プロジェクトの進行をきっかけとして機関間での連携が促進されていると推測される。また、国際化やマイノリティに対する学内の意識の醸成が、留学生のメンタルヘルスを支援する上での課題として挙げられた。

英国とは異なり、日本の国公私立大学の多くで職員のジョブローテーションが定期的に行われており、東京大学の場合、2~3年毎の配置換えや他機関への研修・出向制度がある⁵³。ジョブローテーションの利点は学内他部署や他機関の職員との人的ネットワーク形成ができることで、**whole university approach** や **whole sector approach** を日本国内で実践することは可能であり必要であると考えられる。部署や部局、さらには大学の垣根を越えてメンタルヘルス支援に取り組むために、大学上層部のリーダーシップと意思決定が不可欠であるが、意思決定のために必要なエビデンスを蓄積し、学生を継続的に支援するのは外ならぬ大学教職員一人ひとりである。留学生の個人情報と特定されない形でグッドプラクティスや問題点を広く情報共有すれば、他大学の事例を参考に自大学において迅速な意思決定が可能になり、業務の効率化にも寄与するだろう。

大学教職員は学生にとって身近な存在であり、何気ない言動が学生のメンタルヘルスに影響を及ぼす可能性がある。自分とは異なる価値観や自身に内在する固定観念を認識することは非常に重要であり、最も確実な方法の1つは教職員が留学や海外勤務などの経験を積むことであるが、教職員研修や留学生との対話などを通して気付きを得ることも可能だろう。同時に、メンタルヘルスの専門家ではない教職員が対応可能な範囲・限界を把握することもまたメンタルヘルス支援においては重要な点である。

5. おわりに

本稿の課題として、英国大学教職員のみをインタビュー調査対象者とした点が挙げられる。英国大学のメンタルヘルス支援制度や実担当者が抱えている問題意識を明らかにすることはできたが、支援を受ける留学生がどのようなニーズを持っているか、現状の支援体制をどのように評価

⁵³ <https://www.u-tokyo.ac.jp/recruit/info/car007.html> (2022年1月26日アクセス)

しているかを明らかにすることはできなかった。このため、留学生や学生自治会などを対象とした調査が今後期待される。また、日本国内の大学において留学生のメンタルヘルス支援に従事する教職員にもインタビューすることができていれば、日本の実情に即したより深い考察や提案が可能になったと思われる。

何事も合理的にアプローチする英国において、留学生のメンタルヘルス支援についても合理的な方法があるのではないかと思ひ、本調査を開始することにしたが、一連のインタビュー調査を通して最も感銘を受けたのは、(各大学において規定や体制が整備されているという前提はあるものの)「留学生」と一括りに考えず、個々の学生の特性に合った支援を検討・実践することが肝要という教職員のビリーフである。支援を求める留学生一人ひとりと向き合うためにも、**whole university approach** や **whole sector approach** を促進するとともに、メンタルヘルス悪化の予防や早期介入を意識した対応やスタッフトレーニングに取り組む必要があると考えられる。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、お世話になった方々にこの場を借りて感謝の意を表したいと思ひます。はじめに、メンタルヘルスに関する知見や各大学における興味深い活動内容をご教示くださいました、ノッティンガム大学の小寺康博先生、ユニバーシティカレッジロンドンのケイブル典子先生、Chloe DaCosta 氏、ウエストロンドン大学の Michael Cobden 氏、Eirini Tatsi 氏、匿名を条件にご協力くださった担当者の皆様に格別の感謝を申し上げます。そして小林直人センター長をはじめとする日本学術振興会ロンドン研究連絡センターの皆様、日本学術振興会東京本部及び東京大学の関係者の皆様にお礼申し上げます。

参考文献及びウェブサイト ※引用順

- World Health Organization, Mental health: strengthening our response. <https://www.who.int/news-room/factsheets/detail/mental-health-strengthening-our-response> (2022年1月3日アクセス)
- 大学の8割「学生のメンタルケアが課題」 とくに心配なのは2年生. 朝日新聞. 2021年9月19日, <https://www.asahi.com/articles/ASP9K6R9XP80USPT00B.html> (2021年12月5日アクセス)
- Impact of COVID-19 on poor mental health in children and young people ‘tip of the iceberg’, UNICEF, 2021年10月4日 <https://www.unicef.org/press-releases/impact-covid-19-poor-mental-health-children-and-young-people-tip-iceberg> (2022年1月20日アクセス)
- Hubble, S. & Bolton, P. (2020). House of Commons Library: Briefing Paper Number 8593, 17 December 2020: Support for students with mental health issues in higher education in England. <https://researchbriefings.files.parliament.uk/documents/CBP-8593/CBP-8593.pdf> (2022年1月4日アクセス)
- Equality Act 2010 <https://www.legislation.gov.uk/ukpga/2010/15/contents> (2022年1月20日アクセス)
- Beaufoy, S., Weber, D., Fisher, K. & Friend, H. (2021). Disability, Mental Health & Inclusion Policy for Staff and Students, University of Warwick https://warwick.ac.uk/services/equalops/findsupport/policies/disability_mental_health_and_inclusion_policy_february_2020_v2.pdf (2022年1月20日アクセス)
- Universities UK (2020). Stepchange: mentally healthy universities. Universities UK. <https://www.universitiesuk.ac.uk/what-we-do/policy-and-research/publications/stepchange-mentally-healthy-universities> (2022年1月20日アクセス)
- JSPS London Newsletter No.64 https://www.jsps.org/newsletter/JSPSNL_64.pdf#page=15 (2022年1月6日アクセス)
- Hughes, G. & Spanner, L. (2019). The University Mental Health Charter. Leeds: Student Minds. https://www.studentminds.org.uk/uploads/3/7/8/4/3784584/191208_umhc_artwork.pdf (2022年1月20日アクセス)
- Innovation, partnership and data can help improve student mental health in new £14m drive, Office for Students, 2019年6月5日 <https://www.officeforstudents.org.uk/news-blog-and-events/press-and-media/innovation-partnership-and-data-can-help-improve-student-mental-health-in-new-14m-drive/> (2022年1月8日アクセス)
- Office for Students, Student mental health <https://www.officeforstudents.org.uk/advice-and-guidance/student-wellbeing-and-protection/student-mental-health/> (2022年1月8日アクセス)
- Funding boost to support student mental health, Office for Students, 2021年8月17日 <https://www.officeforstudents.org.uk/news-blog-and-events/press-and-media/funding-boost-to-support-student-mental-health/> (2022年1月8日アクセス)
- HESA <https://www.hesa.ac.uk/> (2022年1月4日アクセス)
- OECD (2021). Education at a Glance 2021: OECD Indicators, OECD Publishing, Paris, <https://doi.org/10.1787/b35a14e5-en> (2022年1月6日アクセス)
- [F]英国留学の人気の陰に EUからの出願が大幅減. 日本経済新聞. 2021年9月13日, 日本経済新聞電子版, <https://www.nikkei.com/article/DGXZQOCB130BC0T10C21A9000000?unlock=1> (2022年1月6日アクセス)

International Education Strategy: 2021 update: Supporting recovery, driving growth

<https://www.gov.uk/government/publications/international-education-strategy-2021-update/international-education-strategy-2021-update-supporting-recovery-driving-growth> (2022年1月6日アクセス)

Mori, S. (2000). Addressing the mental health concerns of international students. *Journal of Counseling and Development*, 78, 137-144.

Taylor, G. & Ali, N. (2017). Learning and Living Overseas: Exploring Factors that Influence Meaningful Learning and Assimilation: How International Students Adjust to Studying in the UK from a Socio-Cultural Perspective, *Educational Sciences* 7, No. 1:35. <https://doi.org/10.3390/educsci7010035> (2022年1月24日アクセス)

Pedder-Jones, C., Lodder, A. & Papadopoulos, C. (2019). Do predictors of mental health differ between home and international students studying in the UK?, *Journal of Applied Research in Higher Education*.
<https://doi.org/1108/JARHE-03-2018-0040> (2022年1月24日アクセス)

Furnham, A., & Chan, E. (2004). Lay theories of schizophrenia: A cross-cultural comparison of British and Hong Kong Chinese attitudes, attributions and beliefs. *Social Psychiatry and Psychiatric Epidemiology*, 39, 543-552.
https://www.researchgate.net/publication/226974384_Lay_theories_of_schizophrenia (2022年1月24日アクセス)

Liu, M. (2009). Addressing the Mental Health Problems of Chinese International College Students in the United States, *Advances in Social Work* Vol. 10 No.1 (Spring 2009), 69-86
<https://journals.iupui.edu/index.php/advancesinsocialwork/article/view/164/205> (2022年1月24日アクセス)

Office for Students, Supporting international students <https://www.officeforstudents.org.uk/publications/coronavirus-briefing-note-supporting-international-students/#support> (2022年1月24日アクセス)

Times Higher Education, Impact Rankings 2021: good health and well-being
https://www.timeshighereducation.com/rankings/impact/2021/good-health-and-well-being#!/page/0/length/25/locations/GBR/sort_by/rank/sort_order/asc/cols/undefined (2022年2月3日アクセス)

Office for Students, TEF outcomes <https://www.officeforstudents.org.uk/advice-and-guidance/teaching/tef-outcomes/#/tefoutcomes/> (2022年2月3日アクセス)

HESA, HE student enrolments by HE provider <https://www.hesa.ac.uk/data-and-analysis/students/whos-in-he> (2022年2月3日アクセス)

Times Higher Education, World University Rankings 2022 https://www.timeshighereducation.com/world-university-rankings/2022/world-ranking#!/page/0/length/25/sort_by/rank/sort_order/asc/cols/stats (2022年2月3日アクセス)

Quacquarelli Symonds, QS World University Rankings 2022 <https://www.topuniversities.com/university-rankings/world-university-rankings/2022> (2022年2月3日アクセス)

University of Derby, Student Wellbeing Support <https://www.derby.ac.uk/study/student-support/health-and-wellbeing/> (2022年1月5日アクセス)

The Wellbeing Thesis <https://thewellbeingthesis.org.uk/> (2022年1月5日アクセス)

University Mental Health Advisors Network <https://www.umhan.com/> (2022年1月18日アクセス)

National Association of Disability Practitioners <https://nadp-uk.org/> (2022年1月18日アクセス)

University of Leeds, Welcome Buddy Scheme
https://students.leeds.ac.uk/info/10600/opportunities/1526/welcome_buddy_scheme (2022年2月7日アクセス)

Globally MindEd <https://www.thegloballyminded.com/> (2022年1月5日アクセス)

University College London, Extenuating Circumstances Procedure 2021-22 <https://www.ucl.ac.uk/academic-manual/chapters/chapter-4-assessment-framework-taught-programmes/6-extenuating-circumstances/extenuating>
(2022年1月6日アクセス)

University College London, Section 5: Reasonable Adjustments <https://www.ucl.ac.uk/academic-manual/chapters/chapter-4-assessment-framework-taught-programmes/section-5-reasonable-adjustments> (2022年1月6日アクセス)

University College London, If you are concerned about a student <https://www.ucl.ac.uk/students/support-and-wellbeing/if-you-are-concerned-about-student> (2022年1月6日アクセス)

University of West London, Students champion wellbeing and mental health support <https://www.uwl.ac.uk/current-students/student-news/students-champion-wellbeing-and-mental-health-support> (2022年1月6日アクセス)

Disabled Students' Allowance <https://www.gov.uk/disabled-students-allowance-dsa> (2022年1月6日アクセス)

University of West London, People like us <https://www.uwl.ac.uk/current-students/support-current-students/people-us>
(2022年1月6日アクセス)

Togetherall <https://togetherall.com/en-gb/> (2022年1月6日アクセス)

London Higher <https://www.londonhigher.ac.uk/> (2022年1月6日アクセス)

国立大学法人東京大学「Student Counseling Center」 https://www.u-tokyo.ac.jp/en/current-students/counseling_center.html (2022年1月26日アクセス)

国立大学法人東京大学「2021年(R3年)11月1日現在 外国人学生・留学生数」 <https://www.u-tokyo.ac.jp/content/400177950.pdf> (2022年1月6日アクセス)

国立大学法人東京大学「東京大学職員採用案内2022」 https://www.u-tokyo.ac.jp/recruit/info/index_j.html (2022年1月26日アクセス)